

## 富士川游の宗教活動

—正信協会における事業を中心に—

土屋 久

順天堂大学 医史学研究室研究生

### はじめに

本発表は、富士川游(1865-1940)の多様な宗教活動の中でも、特に、正信協会での事業の報告をおこなうことを第一の目的とする。その上で、彼がおこなった実践的な宗教活動を研究する必要性についても若干の言及をおこなう。

富士川の正信協会での事業については、同郷の後輩で哲学者の三枝博音(1892-1963)が、「先生(富士川游のこと—土屋)の宗教生活の一つのあらわれとして記すべきものが多々ある」と、その重要性を『富士川游先生』の中で指摘しながらも、紙数の関係で叙述を閉じている。

本発表では、主に正信協会の機関誌であった『法爾』を資料に、上述の問題に答えようとするものである。

### 1 正信協会と『法爾』

富士川游が、真宗の熱心な信仰者であったことは周知の通りである。その彼が、1916年(大正5)に親鸞上人讃仰会を組織し、翌々年には、会の機関誌として『法爾』を発行する。そして、1919年(大正8)に、親鸞上人讃仰会を正信協会と改め、富士川は、この会の中心として、さまざまな宗教活動を展開していくのである。ちなみに、会の趣旨には次のように書かれている。

「本会ハ同志相謀リテ、親鸞聖人ノ教ヲ奉ジ、コレニ依リテ以テ精神生活ノ安住及ビ向上ヲ図ランコトヲ期ス」。

この会は、富士川の死とともに実質上の活動を終えている。ただし、先の三枝によると、実際は富士川の死後四年の間は活動を続けていたらしいが、太平洋戦争の激化にともない、1944年(昭和19)の総会で解散が決定され、毎月発行されていた機関誌『法爾』も311号をもって廃刊されることになったと記録されている。

### 2 富士川游の事業展開

正信協会の協会規則の「事業」の部分には、(イ)談話会ヲ開クコト (ロ)聖典ヲ講讀スルコト (ハ)講演会ヲ開クコト (ニ)文書ヲ刊行スルコトの四点が記されている。こうした、事業計画がどのように展開されてきたかは、『法爾』の「雑報」の欄を紐解いてみることにより垣間みられる。

「雑報」欄には、正信協会の活動報告が毎号載せられ、号により精粗はあるものの、会の毎月の事業展開が分かるのである。ちなみに、1929年(昭和4)11月に発行された『法爾』141号には、東京、横浜、鎌倉、神戸で開催された例会での模様や参加者の氏名が記され、神戸の例会では、富士川が仰信解信の意義について講話をおこなった後、座談会に移り、熱心な質疑応答が続き、「近来稀なる盛会裡に十時閉会」と書かれる。

この「雑報」の考察により、上記(イ)~(ニ)の「事業」は、主として以下の四つの活動を通じて、正信協会の事業として現実化していった。

- ①本部・支部の例会での講演・講話 ②各種の勉強会 ③聖人の旧蹟の巡拝 ④各種著書の発行

### おわりに

先に記したとおり、富士川は真宗の熱心な信仰者であり、たんなる宗教思想の研究家ではない。そのため、信仰者としての富士川の活動を理解していくためには、宗教について書かれた著作群の精読により彼の思想面を考察していく作業とともに、彼が如何なる実践的な活動をおこなっていたのかを知ることは不可欠である。

富士川は、その語録の中で、「会の世話をするにも、それをすることそのことが自分の仕事であり、又生活であり、又それをすることによって、自分を見て行くことが出来るのである。(中略)会のことだからといって自分の生活と切り離して考えると、端書の上書や、題紙を書く職人に過ぎない。そういう職人はいつまでたっても物にならない。丁度、宗教と生活を別々に考えるのと同じである」と言っている(『富士川游先生』)。

信仰者富士川游にとっては、会の活動そのものが宗教的な実践であったと考えられる。